新型コロナウイルスによる休止、再び

10月28日に50人以上のイヴェントを禁止されたスイスの音楽界は、教会などで50人以下の聴衆を前に決行された少数の演奏会を除いて、突然休止を強いられた。11月にルツェルン交響楽団と日本公演を組んでいたクリスティアン・ツィメルマンは、10月末にKKL（ルツェルン・カルチャー・コングレスセンター）で披露したプログラムを持って日本に出発する予定だったが、ツアーは中止となり、今回決定された感染防止対策により、3日後に控えていたKKLの公演もキャンセルとなった。ベートーヴェン生誕250周年のために彼が準備してきた演奏会の90パーセントがキャンセルとなった状況を「悲劇」と表現したのが印象的だった。

チューリヒ歌劇場ではオーケストラに一人陽性反応が出た時点で一時閉鎖となったが、「このまま続けていたら、感染者が急増していただろう」と、団員の一人は振り返る。アンドレアス・ホモキ総裁は、今シーズンの目玉演目であるヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》の演出期間に感染し、遠隔で舞台稽古をこなした。12月6日の初日は、オーケストラと合唱団を練習場から遠隔共演させ、50人の観客で決行されるが、ARTEテレビが生放映し、翌日から3カ月間https://www.arte.tv/de/videos/RC-016485/saison-arte-opera/上で視聴できる。このようにオンラインで視聴できるチャンスが増えたのは、コロナ禍の唯一のメリットといえる。この演目は、任期最後の年を迎えたファビオ・ルイジ音楽総監督とホモキ総裁が共同制作する最後のニュープロダクションだ。ドイツ人二人の初役、バリトンのクリスティアン・ゲルハーヘルが題名役に、クリストフ・フィッシュエッサーが敵のフィエスコで、それが鍵となるだろう。

チューリヒ歌劇場のヴェルディ・ガラ

思い返せば、6月6日から300人以上のイヴェントが解禁となり、スイスの各団体はこぞって夏休み前の公演を打ったが、そのなかでオンライン配信をいちばん効果的に使ったのはスイス・ロマンド管弦楽団だ。WHOがパンデミック宣言を出した3月11日当日、急きょ手配して無観客公演をHP上で公開した。そのちょうど3カ月後、今度はヴィクトリアホール1階席にチェロ以外の弦楽器とソリスト、舞台上にチェロと打楽器、バルコニー席に管楽器と合唱団を散らばせ、客席の中心でジョナサン・ノットが回りながら指揮して《第九》を演奏した。ジュネーヴ大劇場合唱団とチューリヒ・シングアカデミーに、ソーニャ・ヨンチェヴァとマリー=クロード・シャピュイ、マウロ・ペーター、マヌエル・ヴァルザーのソリストで、3カ月ぶりに演奏できる喜びにあふれていた。12月27日まで前述のARTEテレビで視聴できる。

この5カ月弱の間に聴いたなかで、身震いするほどライヴの良さを感じたのは11月号で端的に触れるしか余白がなかったチューリヒ歌劇場のヴェルディ・ガラだ。1000人以上のイヴェント禁止を受けて、《シチリア島の夕べの祈り》上演を断念し、出演予定だった歌手たちによるガラ・コンサートに代わった。同「序曲」から弾き始めたオーケストラは、ソーシャル・ディスタンスを保った配置だが、ヴェルディの息遣いを途絶えさせないように、静かな炎を燃やし続けているような気迫が感じられるルイジの指揮で、劇場中を震わせた。「生演奏は楽器を通した音の振動が、聴覚のみならず身体中を揺さぶって感動を呼ぶ」ことが改めて実証された。練習場からリモート演奏した音はいくら精密でも生きていないのだ。

チューリヒ歌劇場のヴェルディ・ガラから。左から、アグレスタ、ルイジ、ヒメル、ケルシー ©Toni Suter

続いて、プロチーダのアリアをアレクサンダー・ヴィノグラドフが、安定した発声で歌った。次は《ドン・カルロ》に移り、エリザベッタには軽すぎる声のマリア・アグレスタが、音楽的表現は完璧に歌い上げた。ハワイ出身のバリトン、クイン・ケルシーは歌い出しで声がかすれることが多いが、独特の甘いフレージングで歌い終わるころには聴衆の心をつかむ歌手だ。《トロヴァトーレ》の二重唱でも、フェッランドのイルド・ソンと共にヴェルディレガートで満足させた。《ルイザ・ミラー》でブライアン・ヒメルが堂々としたテノールを聴かせたあと、ソンの見せ場のはずの《マクベス》、〈バンクォーのアリア〉では、オーケストラとのユニゾンに声が消されてしまった。前半最後は《ドン・カルロ》に戻り、アグレスタとヒメルのドラマティックな二重唱で、熱い興奮を残した。

後半は《シモン・ボッカネグラ》で始まったが、アメーリアのアリアもアグレスタには重そうだ。ケルシーとヴィノグラドフの劇的な二重唱のあと、《トロヴァトーレ》の〈見よ、恐ろしい炎を〉ではヒメルが稲妻のようは高音を聴かせた。再度《ドン・カルロ》に戻り、ヴィノグラドフがフィリッポ2世を上手に歌ったが、キャラクターも声も、まだ若い。最後は《トロヴァトーレ》の三重唱で、ケルシーに伯爵の品格が足らなかったものの、劇的なクライマックスとなった。この幸福感を支えに、またライヴを味わえるまで耐えていきたい。